

〔巻頭言〕

勘の良さは努力のあかし

日本 SPF 豚研究会 小 林 秀 樹

昨年 11 月、「ニュートリノ」を世界で初めて観測し、2002 年度ノーベル物理学賞を受賞した小柴昌俊さんが 94 歳で亡くなりました。私に大きな感銘を与えてくれた方なので残念です。それはノーベル賞受賞もありますが、小柴先生の「文化力」に対する造詣の深さです。ノーベル賞受賞直後に催された授賞者らの座談会が日本時間の深夜に BS NHK でも生放送され、司会者がクラシック音楽、特にモーツァルトを愛する先生に、先生の特に好きなモーツァルトのなんだかという曲と今回のノーベル賞との関係性みたいなやぼったい質問をしたのですが、その時の返答に私は魅了されました。先生は「僕の発見は僕でなくとも、いずれは科学技術の発展と共に誰かがやっただろう。何某という曲は天才である彼だからこそ出来たものであって、彼の存在無くして未来永劫この世に出てくるものではなかった。科学技術は時代と共に進歩を続け、新たな発見は必然的であるが、すばらしい芸術は時代を経ようとも必ずしも出てくるものではない。」と。

一方で、科学者としての先生の名言として、「物事をとことんまで突き詰めていると、勘の当たりが良くなるような気がします」があります。これは以下の内容を端的に表現したものです。「物事を本質に向けてどこまでも追求していけば色々なものが広く、深く、見えるようになっていきま

す。結果として、ピンポイントで勘どころを突くことができるようになります。これも自然界の原理ですね。(中略) 物事の本質はどんな分野から追求していっても集約された同じところにたどり着いていきます。その本質をどの分野からでも、知り、体得していけばあらゆることに応用することができますね。(中略) ひとつのことを深く追求できればその深さで世界や交流は広まっていきます。交流はより高いレベルと進めていくことがさらにその先の探求にも役立つこととなります。ぜひ、あなたの得意な一点を、どこまでも深く高く、遠くまで突き詰めてください」。そういえば、今の私の勤務地、東京小平はかつての農林省家畜衛生試験場で、その一部は高校と公園になっています。その公園内には「探求」と刻まれた石碑が残っています。その二文字は農研機構の一部となった動衛研から見聞きすることがなくなりとても残念です。

まもなく本格化するであろう AI 時代に生き残るには、この「勘のあたり」が良くなるような努力をしなければならぬと思います。そのためにまず必要なのが、「教養力」、分かりやすく言うと「文化を理解して、何かを生み出す文化力」です。モーツァルトもこれがあって作曲できたと思います。学校や研修で教わることは、あくまで社会人としての基本であって、その基本を自分の能力と

してどこまで大きく成長させられるかは、個人の努力と勉強によります。前例を踏襲するだけ、安易な情報収集法で得られた知見で安心してしまうこと、第三者のデータを既知の手法で解析し自分の成果とってしまうことなど、まさにAIが間違わない、逆に最も得意とするところと勝負できるでしょうか。このことは、評価者側にもいえることで、「文化力」のないヒトは個人の「一日千里」を見出せず、組織を弱体化させ、あるいは第三者にその有能な人材をとられてしまいます。残念ながら今の日本には政治家、官僚、研究者あるいは法曹界に至る広い分野に、多くのこの残念なヒトが存在するように思います。こんなはなしでは若手の方々のモチベーションが上がらないですよ。でも安心してください。自助努力を怠らなければ、いずれ「蒼蠅驥尾」できるような師匠に巡り会えますよ。頑張ってください。

最後になりますが、中国戦国時代の法家である韓非の著書「韓非子」から「亡徴」全47条を載せました。秦の始皇帝は敵国の書物である韓非子に心打たれ、彼の国家統一に大きな役割を果たしたと云われています。「亡徴」だけみても、ヒトの生き様は何千年を経ても変わらないことが判ります。政治家や役人あるいは資本家の方々にはおすすめてです。

韓非子（第十五）：亡徴（全47条）

1、およそ君主の中で、小国であるのに大臣の家が大きく、君主の権勢が弱く大臣の勢力が大きいと亡びる。2、法や禁制を疎かにして謀略に勤しみ、国内の政治が荒れていて外国の援けを当てにしていると亡びる。3、群臣が（誤った）学問を好み、大臣の子が弁舌を好み、商人が外国に財

を蓄え、下民が上に依存していると亡びる。4、君主が宮廷や造園を好み、馬車の装飾や道具を好み、民を疲弊させ財貨を濫用していると亡びる。5、君主が日時吉凶を占い、鬼神に仕え、卜占を信じ、祭祀を好んでいると亡びる。6、君主が進言を聴くかどうかは臣の爵位によって決め、実績を確かめることをせず、一人を信任して自分の耳目していると亡びる。7、官職は重臣の口添えによって得られ、爵禄は賄賂によって得られると亡びる。8、君主の心が緩んでおり、成果もなく、意志が弱く決断力がない、物事の是非を決められず、方針が定まらないのは亡びる。9、君主が貪欲で飽きることなく、利益に近づき手に入れることばかりを好むのは亡びる。10、君主がでたらめを好み、法は周知されず、弁舌を好んで実用性は求めず、見た目の華美さにとらわれて実際の功績を調べないのは亡びる。11、君主が浅薄で心の内がわかり易く、秘密を漏らして隠すことができず、気配りができず粗雑で、群臣の言葉が筒抜けであるのは亡びる。12、君主が強情で和せず、諫言を容れず勝つことを好み、国家を顧みず、軽々しく行動し自信過剰なのは亡びる。13、同盟国の援助を待みとして近隣諸国を侮り、大国の救いを当てにして他の迫ってくる国を侮るのは亡びる。14、遊説の士でその家族は外国にいるような者が、上は外交の謀略にあずかり、下は民政にあずかるのは亡びる。15、民が宰相を信頼し、君主に心服しない、またその君主は宰相を信頼して罷免させられないのでは亡びる。16、国内にいる有能な者を採用せずに国外の人材を求め、実際の功績によって評価せず、名声によって採用し、他国の論客が高位にあり、股肱の臣を凌ぐのは亡びる。17、嫡子が軽んじられ、庶公子と勢力が拮

抗し、太子が定まらないまま、君主が世を去るのは亡びる。**18**, 慢心して反省せず国が乱れても自らは自惚れ、国内の資産を考えもせず近隣諸国を侮るのは亡びる。**19**, 小国であるのに謙虚でなく、兵力が弱いのに強国を恐れず、無礼な振る舞いで近隣の大国を侮り、強欲で外交下手なのは亡びる。**20**, 太子は決まっているのに強国から公女を娶り、正妻にすると太子は危うくなり、そうなるに群臣は心変わりし、群臣が心変わりするようでは亡びる。**21**, 臆病で守りも弱く、先のことを考えるも心は優柔不断で、こうすればよいということがわかって、断行できないのは亡びる。**22**, 君主が外国に亡命し、国には別の君主が立てられ、太子は外国に人質に出され、未だ帰ってこないのに、新たに太子を立てる、このようなことになると民心は離れ、民心が離れば亡びる。**23**, 君主が大臣を辱めてその身を馴れ馴れしく扱い、庶民を刑罰によって殺し、しかも法の使い方がでたらめであれば、民は怒りを抱き、大臣は恥を忘れない。これが常となれば賊が生じ、賊が生ずれば亡びる。**24**, 大臣ふたりがそれぞれ同等の勢力を持ち、君主の親族が多く、勢力も強い。国内では派閥が争い、外国に援けを借りて勢力を争っているようでは亡びる。**25**, 君主が愛妾の言葉を聴き入れ、道化などの意見が用いられ、朝廷内外に悲しみや怨みが多く、君主がしばしば法を曲げて乱暴に振る舞うようでは亡びる。**26**, 君主が大臣を軽んじ、一族の年長者に礼を尽くさず、民を酷使し、無実の者を殺すようでは亡びる。**27**, 君主が智謀を好んで法を曲げ、時には私的な都合を公の場に持ち込み、法や禁を変え、命令を下すようでは亡びる。**28**, 地形的な要害が無く、城郭も粗悪、備蓄は少なく、財産も少ない。防備も無

いのに軽々しく他国に攻め入るようであれば亡びる。**29**, 君主や親族が短命で、君主がしばしば死去し、赤子が君主となる。大臣が一切を取り仕切り、他国の客を集めて徒党を組み、しばしば土地を割譲して他国との交流を当てにするようでは亡びる。**30**, 太子の地位が高く有名で、味方が多く勢力も強く、大国との交流も多い。このように太子の威勢が早いうちから備わっているようでは亡びる。**31**, 君主の心変わりが激しく、軽々しく行動し易く、苛立ち前後の分別がつかなくなるようでは亡びる。**32**, 君主が怒りやすくすぐに兵を出したが、農業や練兵を疎かにして、軽々しく他国へ攻め込むようでは亡びる。**33**, 貴族同士が妬みあい、大臣の勢力が盛んで、外は外国の力を借り、内は民を苦しめ、私怨のために相手を攻め、君主がそれらを罰することができないようでは亡びる。**34**, 君主のできが悪く、兄弟に賢人あり。太子の勢力が弱く、庶公子の勢力が拮抗している。官吏の力が弱く、民衆の威勢がよい。このようであれば国内は騒々しく、国が騒々しいようでは亡びる。**35**, 君主が怨みを隠して発せず、罪を犯した者を罰しない。群臣はひそかに君主を憎み、憂慮するも、長くいまだに結果を知ることができないというようでは亡びる。**36**, 軍を出すのに將軍の権力がはなはだ重く、辺境の地の守備長官の地位がはなはだ高く、彼らが専制して命令を思い通りに下し、許可を得ず直接事を為すことができるようでは亡びる。**37**, 夫人の性は乱れ、君主の母は間男を招き入れ、後宮と朝廷で人の往来が自由で、男女の分別がない。これを両主という。そして両主であれば亡びる。**38**, 正妻の地位が低く、妾の地位が高い。太子の地位が低く、庶公子の地位が高い。宰相が軽んじられ、君主の

取次役が重んじられる。このような状態であると宮廷内外において乱れ、乖離する。朝廷内外が乱れ、乖離すれば亡びる。39, 大臣の地位がはなはだ高く、偏ってひいきする徒が多く勢力も強い。この大臣が君主の耳目を塞いで国をほしいままにしているようでは亡びる。40, 私的な臣下が任官され、軍人の家系の者は遠ざけられ、町での善行が取り上げられて採用され、官職での功績は捨てられる。私的な行動を貴び、公的な功績を蔑ろにするようでは亡びる。41, 君主の家には財は無く、大臣の家には財が満ちている。土着の民は貧しく、他所者が富む。耕戦の士は困窮し、商人や工芸家は儲けている。このようであれば亡びる。42, 君主が大きな利益があっても手を出さず、禍の兆しを知っても備えをせず、争いや防衛に淡白で、務めて仁義を唱えて自らを飾り立てるようでは亡びる。43, 君主が君主の孝をなさずに、小人の孝を慕い、国の利益を顧みず、母の言葉に従う。母や夫人などが国をあやつり、宦官が政治をあずかるようでは亡びる。44, 君主が能弁だが法を用いない。その心は智者だが術を心得ていない。君主は多才だが、法や規則で事にあたらない。このようであれば亡びる。45, 新参の臣が進み、古参の臣が退く。愚者が権勢を振るい、賢

良の者が活躍できない。功績のない者の地位が高く、苦勞して功績のある者の地位は低い。このようであれば臣下は怨みを抱き、臣下が怨みを抱くようであれば亡びる。46, 君主の目上の親類や兄弟、大臣の爵禄が功績以上にあり、紋章や服装が身の程を超え、彼らの宮殿や食事ははなはだ豪華で、君主はそれを禁ずることができない。そうであれば臣下の欲望は際限がない。臣下の欲望に際限がなければ亡びる。47, 君主の孫や娘婿が同じところに住み、近隣に横暴をふるうようであれば亡びる。

なお、亡徴とは、必ず亡ぶということではなく、亡ぶ可能性があるということを使う。例えば堯が二人いたとしたら二人共に王となることはできず、桀が二人いたとしても二人共に亡びることもない。亡国の王となるきっかけは、必ずその治乱や強弱が偏るからである。木が折れるのは必ず虫がつくからであり、垣が壊れるのは必ず隙間ができるからである。しかし木に虫がついても強風が吹かねば折れず、垣に隙間ができて大雨が降らねば壊れない。万乗の君主が術を心得、法を行い、亡国の徴候のある君主に対して、風雨のごとき働きをすれば、天下を併合することさえ難しくないだろう。と結んでいる。